

Pinyo

動臨研 野生動物ニュースレター Vol.40



Contents

- ▶ ようこそツバメさん 安川 邦美
- ▶ 山仕事での楽しみ 澤田 聖美
- ▶ フクロウ保護記録～保護から放鳥まで～ 小笠原淳子
- ▶ 野生鳥獣保護管理基金への御協力のお祝い 編集部だより

ようこそツバメさん



やすかわ動物クリニック（京都府）

院長 安川邦美

開院してまもなく5年が経過しますが、春から初夏にかけて毎年楽しみにしていることがあります。それは開院1年目からツバメが病院の玄関先で巣を作り、産卵、孵化、子育てをし、そして元気に巣立って行くのを見守ることです。巣は最初に作られたままですが、当初はカラスに巣を壊されてしまい、私も修復に少し手を貸しましたが自分たちで諦めず修復してくれました。その後はカラス避けの紐を設置するなど手厚い保護が伝わったのか、ツバメ界でその噂が広まったのか、毎年来てくれるようになりました。しかも最初の年は1回だけの巣立ちでしたが、その後2年は2回、そして昨年はなんと3回の巣立ちを確認しています。今年は今時点で2回目の産卵を確認していますが、すでに梅雨の蒸し暑い季節です。最後までなんとか無事に巣立ってくれるように今年も見守り続けたいと思います。

子供の頃、どこの家にもツバメの巣をよく見かけましたが、近年は水田や耕作地の減少、日本家屋の減少など取り巻く環境が変化し、その数が減ってしまっているようです。昔から「ツバメが巣を作ると縁起が良い」と言い伝えられ、特に商家にとっては「商売繁盛」のシンボルとして歓迎され、農家にとっても農作物の害虫を食べてくれる「益鳥」とされています。動物病院にとってはどうなのかは分かりませんが、患者様のご家族が嬉しそうに観察されたり、写真を撮られている姿を見るとこちらも嬉しくなります。少なくとも私も含め見ただけで癒されたり、親ツバメが頑張っている姿を見て励まされているように思います。患者様のご家族の中には「これで〇回目!？」と巣立ちの回数を教えて下さる方もいて、やはり動物病院に来られる方は皆さん動物好きなんだと再認識させられます。

そんなことで最近は「ツバメ」についてよく調べることがあるのでここでご紹介したいと思います。大きさは全長17cm（翼を広げると32cm）で背中黒っぽく、光が当たると光沢のある青色に見えます。また額から喉までが赤く、お腹が白いのが特徴です。鳴き声は「チュチュビチュチュビジクジクビー」と最後が濁ります。巣に雛がいる時に巣に近づくと親鳥は警戒のサインとして「ツピー、ツピー」と鳴きながら飛び回ります。私も巣の中の写真を撮ろうとして何回も怒られていますが、この鳴き方をしていたら近づき過ぎですので巣から離れてあげてください。食べ物は基本的に飛んでいる虫です。「ツバメが低く飛ぶと雨が降る」と言いますが、湿度が高くなると虫たちが地面近くを飛ぶようになるため、飛ぶ虫を食べるツバメも低く飛ぶと言われています。日本でツバメを見られる時期は3月から9月頃で、春夏を日本で過ごす渡り鳥（夏鳥）でその間に子育てをします。ツバメが卵を産んでから巣立つまでは平均約6週間で卵を産むのが4から6日間（1日1個ずつ産みます）、卵をあたためるのに約2週間、雛が生まれてから巣立ちまで約3週間、巣立ってからは飛行訓練や餌のとり方を学習するのに2週間ほど親子で過ごします。その後、秋から冬は東南アジアで過ごすそうです。ツバメの寿命は7年前後とされていますが、生存競争が激しくアクシデントも多いことから平均寿命は短く2年前後とされています。

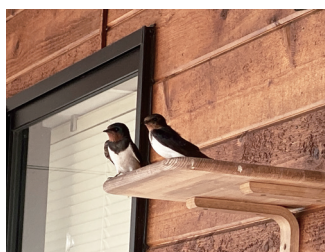
日本で見られるツバメの仲間は主に一般的な「ツバメ」の他に九州以北に生息する「コシアカツバメ」や「イワツバメ」、北海道の海岸や原野、河川、農耕地などに生息する「ショウドウツバメ」、奄美大島以南に生息する「リュウキュウツバメ」、アマツバメ科で本州以南に生息する「ヒメアマツバメ」の6種類があります。「ツバメ」は当院に来ているような上が

空いた「おわん型」の巣を作りますが、コシアカツバメは「とっくり型」、イワツバメは「どんぶり型」、崖などに集団で営巣する「ショウドウツバメ」などそれぞれ特徴的な形の巣を作ります。当院の周りでもツバメの巣を探してみると「コシアカツバメ」の巣があたりましたので、もし今後はツバメの巣

を見つけたら巣の形に注目してみてください。

最後に、前述しましたように「ツバメ」は全国的に減少傾向にあります。公益財団法人日本野鳥の会は「消えゆくツバメをまもろう」と特設ホームページなどを設けて活動されておられます。ご興味のある方は是非ご覧下さい。

(公財) 動物臨床医学研究所 News Letter 「muse」より



ツバメのつがい



巣作り



産卵



六つ子



餌を運ぶ親ツバメ

山仕事での楽しみ

しまね東部森林組合

私は鳥根県安来市の森林組合で調査員として、主に境界調査や林相（どんな木がどの様に生えているか）の調査などを行っています。

何十年と手の入っていない山に入ることも多く、野生動物の痕跡を見つけることがあります。その中でも獣道は最もよく見られ、また笹などが生い茂った山の中では、有難い歩き道になります。（ただし、マダニには注意が必要です。）

他にはイノシシの寝床があります。笹などで作ら

澤田聖美



れているのですが、初めて見たときは思ったよりふかふかで驚きました。

そしてイノシシそのものにも割と遭遇します。すぐに逃げていきますが、人に向かってくる場合もあるので、出会ったときは少し緊張します。

他にはノウサギやキツツキ、キジなども見かけます。鳥の声も色々な種類が聞こえますが、私は鳥に詳しくないのでもっと調べれば楽しめるかもしれません。

しかし中には危険な動物に出会うこともありま

す。クマやマムシ、スズメバチ、マダニなどです。なので、山を歩くときには鈴などの音の出るものを身に付け、虫除けスプレーをしっかりとふります。ハチ用の殺虫スプレーを持って行くこともありま

す。完全に防ぐというのは難しいですが、このような対策はとても大事です。

仕事をしっかりこなしつつ、こういった野生動物との出会いも楽しみたいと思います。



イノシシの親子



キジは林道でよく見かけます



溝に落ちていたアナグマ
このあと市に連絡されたそうです



クマの爪痕と思われるもの
こうやってマーキングするそうです
クマには絶対に出会いたくありません

フクロウ保護記録～保護から放鳥まで～

公益財団法人 動物臨床医学研究所

獣医師 小笠原淳子



2022年5月5日の風の強い日に、保健所からフクロウのヒナが搬入されました。町内清掃をしていた人が溝に落ちているヒナを発見し、保健所に連絡が入りました。辺りには巣があるような場所は見当たらないとの事で、倉吉動物医療センターで保護することになりました。

搬入時は体重 400g、白い真綿のような羽毛に包まれ、体が濡れていましたが明らかな外傷などはあ

りませんでした（写真1）。私は勝手にこの子をフクちゃんと呼び、動物看護師さんたちを中心にお世話が始まりました。

フクちゃんは元気いっぱい、パイパイと雛独特の可愛い声で鳴き、でも時々一人前にパツパツと嘴を鳴らして威嚇しました。鶏肉を与えるとよく食べ、体重の10～20%を目安に食餌を与えました。餌は鶏肉だけでは栄養的に偏るので、鶏レバー、ハツ

なども加え、さらにカルシウム、ビタミンも添加しましたが、これだけではペリットができないので、冷凍マウスや冷凍ヒヨコも加えて与えると、ペリットも作るようになり、1週間経過すると保護時よりも少し大きくなりました（写真2）。涼しい時間帯には日光浴（外気浴）も行いました

最初は口元に持っていくとよく食べ、置き餌も食べていたフクちゃんでしたが、徐々に自分から食べる量が少なくなってきました。野生では食べられない日もあるだろうと様子を見ていましたがやっぱり時間が経過しても食べず、根負けして、強制給餌をすることになりました。スムーズに給餌できたかと思えば、口に入れる→吐く→口に入れる→吐く・・・と、何度も繰り返しながら食べさせたり、つい『食べないと森に帰られないよ!』と半ば脅したりと四苦八苦しながら給餌を行いました。その甲斐あって？フクちゃんの体は徐々に大きくなり、羽の色も搬入時よりも黒っぽくしっかりしたものになりました（写真3-6）。

その後自ら羽ばたいて少し高い所に行けるようになった頃、飛行訓練を検討しました。当センターの

ドッグランに網を張り、知り合いにお願いして様々な太さの枝を頂き、色々な高さの止まり木を設置してフライングケージを作りました（写真7）。そこに今入っているケージを入れてオープンケージとしました。最初は戸惑っていたフクちゃんでしたが、そのうちケージから自分から出て、高い止まり木まで羽ばたいて、止まれるようになりました。日中ドッグランに出していると、よくヒヨドリやモズなどの野鳥がやってきて、けたたましい声で鳴いて、フクちゃんを牽制しているようでした。近くに巣があるのでしょいか、まるで「うちの子たちを食べないで!」と言っているようでした。

そして飛翔訓練を開始して5日目、保護してから44日目にフクちゃんは放鳥の運びとなりました。まだ鳴き声はヒナのままでしたが、体の色は随分成鳥に近づいていました。きっと今頃はますます大きくなって暮らしていることでしょう。

フクちゃんは治療、飼育に関して多くのことを教えてくれました。今回の経験を次回の保護活動に活かしていきたいです。

フクちゃん
成長の様子



写真1 保護当日



写真2 8日目



写真3 13日目



写真4 20日目



写真5 30日目



写真6 40日目



写真7 フライングケージ

威嚇するヒヨドリ

うちの子を
食べないで

2021年10月1日から2022年6月30日までに野生鳥獣保護管理基金にお寄せいただきました総額は、142,029円でした。ご協力頂きました皆様に心よりお礼申し上げます。

野生鳥獣保護管理基金に御協力お願い致します

近年、人間活動が野生動物の領域にまで広がる一方で、里山の崩壊や気候変動、在来種の増加など、人と野生動物において様々な問題が生じています。

野生どうぶつ友の会は、絶滅危惧種を含む疾病野生動物を再び野生に戻す活動を通じて、命の大切さや動物愛護思想の普及を図っております。

当方の活動は、まだまだ微力ではございますが、長期にわたり続けて参ります。今後とも、御理解御協力を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

<基金送付先>

郵便振込：口座番号 01430-6-14893

口座名：公益財団法人動物臨床医学研究所 野生鳥獣保護管理基金

《表紙の動物》フクロウ

フクロウは北欧から樺太までの亜寒帯から寒帯に生息する、フクロウ目フクロウ科フクロウ属に属する猛禽類です。フクロウ属などに属する鳥をすべて含めて、広く「ふくろう」と呼称することもあります。日本で自然に生息するフクロウを指して言うときは、ウラルフクロウを指すことが多いです。ウラルフクロウは日本全域にわたって分布していて、エゾフクロウ、トウホクフクロウ、キュウシュウフクロウなどの亜種に分類されます。北に住む種類の方が、体の色が白くなる傾向があります。

フクロウは2022年発行のレッドデータブックとっとりでは準絶滅危惧種に指定されています。当財団の倉吉での2017年から2021年の野生動物の収容頭数の内訳をみると、フクロウは毎年1羽ずつ保護されています。この間に倉吉に収容された動物の総数は153頭でしたので、フクロウが占める割合は3.3%でした。

写真は保護されたフクロウのリハビリの一環として、ケージから出して院内の観葉植物にとませたときのものです。慣れない環境に緊張していたようです。

編集部だより

ふくろうは、ギリシャ神話の知恵・芸術を司る女神アテーナーと関りが深く、そこからふくろうは知性と賢さの象徴とされました。アテーナーを町の守護神とするアテナイの銀貨の表にはアテーナーの顔が、裏面にはフクロウが刻印されていて、ふくろう銀貨と呼ばれています。蛇足ですが、アテナイはフクロウが多く生息していたようで、「アテネにふくろう」という諺があるそうです。意味は「釈迦に説法」と同じだそうです。

アイヌではシマフクロウを神と考え、ふくろうが登場する神話が多く存在するそうです。その一方で中国などでは、ふくろうはヒナが親鳥を食べてしまうとの言い伝えから、親不孝者の象徴であったり、無法者を指す言葉である梟雄（きょうゆう）などにも使われています。ふくろうへの感じ方はヒトや時代によって様々なようです。

紀元前492年からのペルシア戦争に勝利したアテナイは支配地域を拡大し、ギリシア最強の軍事都市になりました。しかし、同盟国への高圧的な態度や苛烈な

植民地への圧政などにより内外から信用を失い、結果的に戦争で敗北することになります。その際に決め手の一つになったのが黒海からの穀物輸送を絶たれたことだそうです。紀元前の世界も、今の世の中もあまり変わっていないのかもしれませんが。

ふくろうが賢さの象徴であるのか、無法者であるのか、自らの在り方を問うているように感じます。

水谷雄一郎

公益財団法人 動物臨床医学研究所 野生どうぶつ友の会

〒682-0025 鳥取県倉吉市八屋 214-10
Tel 0858-26-0851 / Fax 0858-26-2158
E-mail dorinken@apionet.or.jp
URL <https://dourinken.com>
<http://d-wildlife.jp/>

ニュースレター「Pinyo」Vol.40 (2022年8月)

発行：公益財団法人 動物臨床医学研究所 野生どうぶつ友の会